地域包括医療の授業から見据える臨床検査技師の未来

◎今嶋 蒼志、宮井 優[1)]、古谷 仁志[1)]
京都保健衛生専門学校[1)]

（はじめに）

わが国では年少人口及び生産年齢人口の減少する中、老年人口が増加しており、諸外国に例をみないスピードで高齢化が進行している。その中で厚生労働省は、２０２５年を目途に地域の包括的な支援・サービス提供体制（以下、地域包括ケアシステム）の構築を推進している。
また、臨床検査技師学校養成所指定規則の一部を改正する省令が公布され、２０２２年度入学生より新カリキュラムでの教育が開始となり、本校でも「地域包括医療総論」という授業が新しく必須単位となった。私は２０２２年度の入学生でありこの授業を受講し、これから必要となるであろう臨床検査技師像について考えたのでここで報告する。

（目的・方法）

「地域包括医療総論」の授業は 3 年次の 4 月より始まり、地域包括支援センターの方を講師に招き介護保険、地域包括ケアシステム等について学んだ。授業内では認知症の方と対話したり、地域包括支援センターでボランティア活動を行ったりして、病院の臨地実習では体験できない地域に密着した医療の形について考える良い機会となった。

（結果・考察）

「地域包括医療総論」の授業では介護保険サービスをはじめ専門知識や理解を深めるために臨床検査技師になってからも自己研鑽に励む必要があることを学んだ。また高齢者や認知症の方々と関われたことは私にとって貴重な体験であり、地域包括ケアシステムの重要性について考える良い機会となった。今後はより一層、地域に密着した医療の形が必要となり、臨床検査技師も在宅医療に関わる必要性が示唆される。このためには主体性を持って問題を発見する姿勢や他の医療従事者と協働して問題解決に取り組むためにコミュニケーション能力が必要となると考える。

（結語）

ボランティアを通して高齢者の方との関わり方について学ぶことができた。患者の話を聞き、意思を尊重しなが

ら接する重要性を理解し、1 人ひとりに向き合う姿勢を持って、よりよい地域づくりに貢献していきたい。

連絡先 075-801-2571／miyai.kyoho@gmail.com（京都保健衛生専門学校 宮井）